

トウイ・キョウの物語 追加解説

注：このファイルは、初版本に掲載できなかった資料、初版後の調査資料などをとりまとめたものです。

脚注 1

成語：滄桑之變、滄海桑田（神仙伝・巻二「王遠」・巻七「麻姑」）

本文：...麻姑謂王方平曰：自接待以來、見東海三變爲桑田、向到蓬萊、水乃淺於往者、略半也、豈復爲陵陸乎。方平乃曰：東海行復揚塵耳。...

解釈：麻姑は語った。「お目に掛かりましてより、早くも東海が三たび桑田に変わるのをこの目で見ました。先ごろ蓬萊に参りましたが、これまた水は昔の大会の時よりも、ほぼ半分ほどに浅くなっていました。やがては陸地になってしまうことでしょう」と。王遠も嘆息して言った。「海中にも土埃が立つとか、聖人も仰せられた」と。

出典：「中国の古典名著」、2001年、自由国民社、p122

但し、本文は「碓豊長さんの詩詞世界」<http://www5a.biglobe.ne.jp/~shici/r60.htm>

脚注 24

詩題：赤壁（杜牧・七言絶句）

折戟沈沙鉄未鏽、自将磨洗認前朝。

東風不与周郎便、銅雀春深鎖二喬。

解釈：折れた戟（げきとかとほことを組み合わせた兵器）が江底に沈んでいるが、まだ錆び付いてはいない。取り上げてみると流れに長く洗われた跡があり、いにしへの遺物とわかった。ここはあの赤壁の戦いがあったところだ。あの時うまく東風が吹いて周郎を助けなかったら、二喬は連れ去られ、春深き銅雀台に囚われの身になっていたことだろう。

単語：赤壁は、208年に孫権・劉備連合軍が曹操を敗った「赤壁の戦い」があった場所（湖北省の長江沿い）。周郎（美男子で美周郎とも呼ばれた）は、孫権軍の武将・周瑜のことで、戦いの勝因となった「火攻めの計」を計画・敢行した。二喬は、孫権の支配地である呉の喬家の絶世の美女姉妹で、姉の大喬は孫策（孫権の亡兄）の妻、妹の小喬は周瑜の妻となった。曹操は「呉を併呑したら二喬を手に入れたい」と語ったと言われる。銅雀台は、曹操が赤壁の戦いの後の210年に根拠地の鄴（ぎょう河北省臨漳県）に建てた壮麗な宮殿（前代未聞の高層建築物）。

出典：「聴く唐詩三十首」、2003年、日中通信社、pp14-15

「早わかり三国志」、原遙平、2003年、日本実業出版社、pp68-69

脚注 29（その1）

成語：金蓮歩（南史・齊東昏侯紀）

脚注 29（その2）

成語：金蓮歩（十八史略・南北朝）

本文：…齊主昏淫狂恣なり。幸するところの潘妃、金をもって蓮花を為り、地上に帖して之を歩ましめて曰わく、「此れ歩歩蓮花を生ずるなり」と。…

解釈：齊主（廢帝東昏侯）は、昏愚・淫乱・乱暴・我儘であった。寵愛する潘妃のために、齊主は黄金で蓮の花を作り、地上に貼りつけ、その上を歩かせて、「これが一步一步の足もとから蓮花を生ずる（極楽浄土の天女の姿）というものじゃ」と言って戯れた。

出典：「十八史略・新版（新書漢文体系 4）」、2002 年、明治書院、pp204-205

脚注 31

成語：断腸（世説新語）

本文：…桓公入蜀、至三峡中。部伍中有得猿子者。其母縁岸哀号、行百余里不去。遂跳上船、至便即絶。破視其腹中、腸皆寸寸断。公聞之怒、命黜其人。…

解釈：桓公が蜀へ攻め入り、三峡までやってきた。部隊の中に、小猿をつかまえた者がいた。母猿は岸を伝いながら悲しみ叫び、百里余り船が行っても追ってきて去ろうとしない。とうとう船に飛び込んできて、そのまま息絶えた。その腹を裂いてみると、腸がずたずたに切れていた。桓公はこのことを聞いて怒り、命じてその者の地位を下げた。

出典：「必携明説漢文・修訂六版」、2004 年、尚文出版、p134

脚注 33

十詩：①惜多才、鴛箋不忍裁。合歡年年為人譜、自身只把相思捱。相思捱、惜多才。

②憐薄命、夜夜成孤另。金屋常聞貯阿嬌、偏咱一面難僥倖。難僥倖、憐薄命。

③悲岐路、羊腸苦難度。路艱未若奴心艱、一折差時千折誤。千折誤、悲岐路。

④憶故人、眼見白頭新。何曾昔宿雲霄上、認得平生車笠真。車笠真、憶故人。

⑤念怒嬌、对鏡頓魂消。我見猶然頻嘆息、怎教紅粉不相嘲。不相嘲、念怒嬌。

⑥哀青春、嬌花似美人。正是上林春色好、願祈風雨潤花神。潤花神、哀青春。

⑦嗟蹇遇、好夢都醒去。非是逢人便乞憐、只因不識朱門路。朱門路、嗟蹇遇。

⑧苦零落、一身無處着。落花辞樹自東西、孤燕失巢繞帘幕。繞帘幕、苦零落。

⑨夢故園、帰魂誰肯援。松菊旧廬都不識、白雲芳草默無言。默無言、夢故園。

⑩哭相思、硬哽已多時。心痛有声吞不住、情深放吐忽傷悲。忽傷悲、哭相思。

解釈：①その才能を惜しみ、彼女の手紙を破くには忍びない。連れ添った年月はその人の歴史となり、わが身はただその思いに耐えるのみである。その思いに耐え、才を惜しむ。「過ぎたる才への後悔」

②薄命を憐れみ、夜な夜な一人別れを思う。立派な家は愛人を住まわせていると聞くが、我々には思いがけない幸運は得がたい。幸運は得がたく、薄命を憐れむ。「廢嫡への憐れみ」

③分かれ道は悲しく、曲がりくねった艱難は越えがたい。道は険しく、貴方の心もまだ苦しく、ほんの一幕の違いが千幕もの遅れとなる。千幕の遅れが悲しい岐路となる。「別れの悲しみ」

④故人を偲べば、更に白髪が現れるのが見える。昔は遥かなる空の果てに住まいし

ていたわけではなく、終生、友情が本当に深く厚いことを知る。友情深く、故人を偲ぶ。「懐かしき人たちの思い出」

- ⑤怒りをもって彼女を思い、鏡に対すると急に魂が消える。私はその微笑を見てはただ嘆息をもらし、誘惑しないでくれと彼女をいかに教えようか。誘惑をせぬよう、怒りをもって彼女を思う。「美しい少女の運命」
- ⑥青春は哀しく、愛くるしい花は美人のようだ。今まさに春色美しく、風雨が花の神を潤してくれることを祈る。花の神を潤し、青春を哀しむ。「過ぎ去りし青春」
- ⑦不遇を嘆き、よい夢はすべて醒めてしまった。人に出会うのではなく、すなわち憐れみを乞う。これも、ただ朱門（金持ちの家）への道知らぬからだ。金持ちの道で不遇を嘆く。「庭園での幸福な日々」
- ⑧苦しく落ちぶれ、この身を置くところもない。花は自ら樹から落ち、孤燕は巢を失いすだれを身に巻いている。すだれをまとい、苦しく落ちぶれる。「不幸な境遇」
- ⑨故郷を夢み、誰しも魂が帰りたがる。松や菊、古い庵などすべて知らぬものであり、白い雲や草もただ黙ったままである。無言で故郷を夢みる。「悲しい波乱」
- ⑩相手を思っては泣き、むせぶ時が何度もあった。心が痛み声を忍ばせきれず、その深い思いは悲しみの傷をこみ上げさせる。悲しみの傷に、相手を思っては泣く。「いない人の記憶」

出典：「金雲翹伝（中国古典名著百部）」、清・青心才人編次、1995年、華夏出版社、p159
和訳は外注したのですが、自信はないのだそうです。

脚注 60

伝奇：南柯太守伝（李公佐撰）

大要：淳于棼^{なんか}の家の南に大きくて古い槐^{えんじゆ}があって、彼はいつもこの木陰で友人達と酒を飲んでいて、貞元7年（791年）9月のこと、彼は泥酔して気分が悪くなった。二人の友人は彼を助けて家に帰り、東側の廊下に寝かせ、自分たちは馬にえさをやったり足を洗ったりして彼の様子を見ることにした。淳于棼は、枕につくとぼうっとして夢心地になった。すると二人の紫色の衣を着た使者が、槐安国王の命令を伝えに來たといって淳于棼を迎え、馬車に乗せると、古い槐^{えんじゆ}の穴の中に入っていった。穴に入ると山や川が見えたが、やがて大きな城門に入ると、楼の上に金文字で「大槐安国」と書かれていた。実はそこは蟻の国であるわけだが、彼はそこの王の次女の金枝公主瑤芳と結婚して、駙馬（王の娘婿の任ずる官）となり、また地方に出ては南柯郡の長官となり、二十年に渡り治め、教化は行き渡り、民衆は彼を謳歌し、功德碑を建て、生きながら神と祭られ、社まで建てられたのであった。彼は時の王に重んじられ、どんどん高官となり、子供も五男二女を得た。しかし、後に檀蘿国との戦いに大敗し、また彼の妻も死んでしまった。彼は長官をやめて、妻の遺骸を持って都へ帰った。ところが、王は彼の権勢が余りに盛んであるのをまずいと思い、彼を自宅に軟禁したが、やがて故郷に帰すことにした。さて淳于棼が目を覚ましてみると、下男は庭で箒を持って掃き、二人に友人は長椅子のところで足を洗い、夕陽もまだ沈まず、飲み残しの酒が、東の窓辺にたたえられている。夢の中で一瞬のうちに一生を過ごしたのであった。南柯の夢、槐安の夢。

出典：「唐代伝奇・新版（新書漢文体系 10）」、2002 年、明治書院、pp109-137（p46）

脚注 70

伝奇：鶯鶯伝（元稹撰）

大要：張生という才子が、兵乱で慌ただしい蒲州の普救寺で、遠縁のおばである崔夫人の連れていた娘（幼名を鶯鶯と^{おうおう}いった）と出会い、それから恋に落ちてしまうのであるが、張生は科擧の試験を受けるために長安に行くことになり、そのまま、この娘のことは捨ててしまう。そしてその後、年を経てまた二人は出会うという経緯を述べたものである。張生は娘を捨てた理由を次のように述べている。「大体において、天が優れた女性に下す運命というものは、自分の身に災いが降りかからない時は、必ずその女性と係わりのある人物に災いが降りかかるのである。もし崔の娘が、富貴の運に巡り合い、貴人の寵愛を受ける勢いに乗るならば、雲や雨にならないのであれば、蛟か竜となって、私は彼女がどんなに変化するか見当もつかない。昔、殷の紂王や周の幽王は、百万の軍を持つ大国を土台にして大した勢力であった。しかし、一人の女性がこれを滅ぼしてしまうと、その軍隊は崩れてゆき、天子は殺されて、今に至るまで天下の笑い者となっている。私の徳はこうした災いに勝つことは出来ない。だから、その女性への気持ちをなくしてしまったのだ」。娘の最後の詩「捨てられた身には何も言うことはありません。かつてあなたとの交わりは、私の方からしかけた恋ですもの。...」。唐代伝奇の最高傑作とされる。元・王実甫の「西廂記（崔鶯鶯待月西廂記）」の素材となった物語。

出典：「唐代伝奇・新版（新書漢文体系 10）」、2002 年、明治書院、pp192-219（p219）

p48（その 1）

成語：比翼連理

詩題：長恨歌（白居易・七言古詩）抜粋

七月七日長生殿、夜半無人私語時。
在天愿作比翼鳥、在地愿為連理枝。

解釈：七月七日（牽牛と織女が年に一度会う日、七夕）、長生殿で、真夜中に誰もいなくなった時、二人（玄宗皇帝と楊貴妃）で密かに誓った。天にあっては比翼の鳥となり、地にあっては連理の枝となろうと。

出典：「聴く唐詩三十首」、2003 年、日中通信社、pp42-57（p57）

p48（その 2）

成語：比翼鳥（山海經・第六・海外南經）

解釈：海外で西南の隅より東南の隅に至るもの。結匈国はその南西にあり、そこの人々は胸が前に突き出ている。南山はその東南にあり、この山からこちらでは虫を蛇^{けつぎょう}といい、蛇を魚とよぶ。比翼鳥はその東にあり、その鳥は青と赤の色で、二羽の鳥が翼^{なら}を比べて飛ぶ。南山の東にあるとも言われる。

出典：「中国の古典名著」、2001 年、自由国民社、p123

脚注 78

詩題：遊子吟（孟効・楽府 or 五言古詩）

慈母手中綫、遊子身上衣。

臨行密密縫、意恐遲遲歸。

誰言寸草心、報得三春暉。

解釈：母が手にしている針と糸は、遠出する息子のために服を縫っているのだ。しばしの別れと思ひ丁寧に縫いながらも、息子の帰りが遅くなるのが心配でたまらない。わたしはまるで小さな草。春の陽光のような母に恩返しなど出来るものだろうか。

出典：「聴く唐詩三十首」、2003年、日中通信社、pp10-11

脚注 127

伝奇：柳氏伝（許堯佐撰）

訓読：…章台の柳、章台の柳。昔日青青たりしも今在りや否や。縦使長条旧に似て垂るるも、亦忖に他人の手に攀折せられぬべし。…

解釈：章台の柳、章台の柳よ。以前見られた緑は今あるでしょうか。たとえ長い枝が昔のように垂れてはいても、きっとよその人に折られたことでしょう。

出典：「唐代伝奇・新版（新書漢文体系 10）」、2002年、明治書院、pp44-53 (p46)

脚注 108

成語：糟糠の妻（後漢書・宗弘伝）

訓読：貧賤の交わりは忘るべからず。糟糠の妻は堂より下さず。

解釈：貧しいときの友達を、なんで忘れられましょう。苦勞を共にした妻を、なんで追い出せましょう。（漢語林：貧しいときに糟糠を食べながら苦勞を共にしてきた妻は、立身出世してからも、表座敷に置いて大切にする）

背景：後漢の光武帝の姉の湖陽公主がやもめ暮らしを余儀なくされていたときのこと、彼女は、光武帝の臣下の宗弘に熱を上げていた。仲を取り持とうとした光武帝が、「よく、金持ちになったら友人をかえ、高い身分になったら妻をかえる、と申すが、これが人の情というものではないか」と宗弘に持ちかけた際の、宗弘の返答。

出典：「中国の古典名著」、2001年、自由国民社、pp38-39

p117

物語：このトゥックとの縁だって、円や四角のように、いつまでも完全であり続けるのかと気に病んでしまう。

訓読：天下に常然なるもの有り。常然とは、…、円き者は規を以てせず、方なる者は矩を以てせず、…。故に天下誘然として皆生きて、其の生くる所以を知らず。同焉として皆得て、其の得る所以を知らず。…（莊子・駢拇第八）

解釈：世の中には一定の姿というものがある。一定の姿とは、…、円いものがコンパスによらず、四角なものが曲尺によらず、…。このように一定のものがあるので、世のものはすべてこれに従って生き、その生の根源に気がついていない。また同じように完全でありながら、その完全さの根源に気がついていない。

出典：「莊子（新書漢文体系 12）」、2002 年、明治書院、pp94-95

脚注 163

伝奇：枕中記（沈既濟撰）

大要：道士の呂翁という者が、旅の途中邯鄲（河北省南部の町。秦の始皇帝が生まれた町でもある）のとある宿屋に立ち寄って休んでいた。たまたま通りかかった町の若者廬生が身の不遇を嘆いているのを聞いて、呂翁は袋の中から枕を取り出して授けた。眠気を催した廬生は、それを枕として眠った。彼は、時の名族清河の崔氏の娘をめとり、進士に挙げられ、その後、ねたみや中傷にあつて左遷され、また呼び返されて高官に就くという複雑な人生を辿りながらも、地方に出れば將軍となって功を立て、中央に入れば宰相となって名声を博し、日頃の欲望は叶えられて死んだ。だが、実はそれは宿屋の主人の蒸す黍の飯もまだ出来上がらぬ間の一瞬の夢だった。

「廬生の夢」、「邯鄲夢の枕」、「黄梁一炊の夢」等の成語によって知られる。

出典：「唐代伝奇・新版（新書漢文体系 10）」、2002 年、明治書院、pp9-19 (p18)

脚注 196

詩題：左遷至藍関示姪孫湘（韓愈・七言律詩）

一封朝奏九重天、夕貶潮州路八千。

欲爲聖明除弊事、肯將衰朽惜殘年。

雲橫秦嶺家何在、雪擁藍関馬不前。

知汝遠來應有意、好收吾骨瘴江邊。

訓読：左遷せられて藍関に至りて姪孫・湘に示す

一封朝に奏す九重の天、夕に貶せらる潮州路八千。

聖明の爲に弊事を除かんと欲し、肯て衰朽を將つて殘年を惜まんや。

雲は秦嶺に横はりて家何にか在る、雪は藍関を擁して馬は前まず。

知る汝の遠來するは應に意有るべきと、好し吾が骨を收めよ瘴江の邊に。

解釈：一通の上奏文を朝に皇帝に奏上した。上奏したその日の夕べには、八千里離れた潮州へ飛ばされた。陛下のためにまがごとを取り除こうとした。そのために『論佛骨表』という上表文を表した。あえて、老いさらばえた身で余命を惜しもうか、惜しくない。雲は、秦嶺に横わって、人を寄せ付けない厳しさを見せ、人家などもありそうにない（自宅のある長安を振り返って、我が家はどの方にあるか、と読む可能性もある由）。雪は藍田関を包み込んで、馬は進もうとしない。あなたが遠いところをやって来たのは、きっと訳があるのだろうと思われる。あなたが遠いところをやって来た、その気持ちはよく分かった。よし。わたしの遺骨は（南方の）瘴気の漂う川べりに収めよ。

出典：「碓豊長さんの詩詞世界」<http://www5a.biglobe.ne.jp/~shichi/p38.htm>

脚注 237

成語：精衛填海（山海経・第三・北山経）

本文：…發鳩之山、其上多拓木。有鳥焉、其状如鳥、文首、白喙、赤足、名曰精衛、其名

自叫、是炎帝之少女名曰女娃。女娃游於東海、溺而不返、故爲精衛、常銜西山之木石以埋於東海。...

解釈：また北へ二百里、發鳩の山という。その上には柘の木が多い。鳥があつて、その状は鳥の如く、文のある頭、白い喙、赤い足。名づけて精衛といい、その鳴き声は自らの名を呼ぶ。これは炎帝の少女で名は女娃という。女娃は東海に遊んで、溺れて返らず、かくて精衛となつて、常に西山の木石を銜えて東海を埋めるのである。

出典：「中国の古典名著」、2001年、自由国民社、p123

但し、本文は「碓豊長さんの詩詞世界」<http://www5a.biglobe.ne.jp/~shici/qiu34.htm>

脚注 247 (その 1)

詩題：錦瑟（李商隱・七言律詩）

錦瑟無端五十弦、一弦一柱思華年。
莊生曉夢迷胡蝶、望帝春心托杜鵑。
滄海月明珠有泪、藍田日暖玉生煙。
此情可待成追憶、只是當時已惘然。

解釈：錦もよりの瑟は、はからずも五十弦。弦一本、琴柱ひとつにもかつての日々が思い出される。莊子が明け方の夢で蝶になつたように心はまどい、望帝が春の心を杜鵑に託したように哀しい。青い海で月明かりの下、人魚が涙を流すように。藍田のあたたかな日の下、玉がはかなく消えるように。この気持ちは思い出すことから来るのだろうか。ただ、この時にはすでに魂は夢の世界をさまよっているのだ。

出典：「詩与画・唐詩三百首」、1997年、上海辞書出版社、p201

但し、解釈は「漢詩を創ろう」http://www.chitanet.or.jp/users/junji/kansi/si_exm.html

脚注 247 (その 2)

成語：莊周夢に胡蝶と為る（莊子・齊物論第二）

訓読：昔者、莊周夢に胡蝶と為る。栩栩然として胡蝶たり。自ら喻しみ志に適するかな。周たるを知らざるなり。俄にして覚むれば、則ち蘧蘧然として周なり。周の夢に胡蝶と為りしか、胡蝶の夢に周と為りしかを知らず。周と胡蝶とは、則ち必ず分有り。此を之れ物化と謂う。

解釈：先ごろ莊周は蝶になつた夢を見た。それはひらひらと飛ぶ蝶で、いかにものびのびとしていたが、自分では莊周であることに気がつかない。ふと目が覚めると、何と自分は莊周ではないか。これはいったい莊周が蝶になつた夢を見たのだろうか、蝶が莊周になつた夢を見たのだろうか。しかし、莊周と蝶とは区別があるはずだ。このような変化を物化（物の変化）という。

出典：「莊子（新書漢文体系 12）」、2002年、明治書院、pp36-37

脚注 248

脚注 247 (その 1) 参照。

脚注 249

脚注 247 (その 1) 参照。

不自然な筋立て

p146、p148 : p146 で、尼僧院長ザック・ズエン (覚縁) は、キョウが盗んできた贈り物を見て、「これは確かに高德の友ハン・トゥイ (恒水) の尼僧院からのもの」と言っている。また、p148 で、ザック・ズエンは、寺の常連のバック・バー (薄婆) に、キョウをかくまうよう頼んでいる。寺の常連なのに青楼の女将という素性を知らなかった。信じやすい、騙されやすい性格という設定だろうか。

p218、p220 : p218 で、キョウは、「胡琴の弦を巻き上げて二度とこれには触れないことにしたい」と言うが、その後 p220 では、「友達のように胡琴を弾いたり詩を詠んで過ごしました」となっている。弦を巻き上げなかったのか。

カタカナ表記を避けた単語 (初出順)

- p11、rosy cheeks : 紅くれないの頬
- p13、guitar : 胡琴、琴、琵琶
- p13、red trousers : 紅いの裳裾
- p13、pin, hairpin : かんざし
- p13、curtains : 窓掛け、暖簾、珠簾
- p14、arch of a bridge : 橋桁、迫持
- p21、brooch : 留針
- p21、chin-piece : 顎紐
- p21、manner : 物腰、行儀
- p22、silhouette : 人影、姿
- p25、spring-roller blind : 簾
- p27、lace-work : 刺繍
- p27、flowery perron : 花のある露台、踊り場
- p29、veranda : 縁側
- p30、lamp : 洋灯、燭台、かがり火
- p30、oil : 油
- p30、silk blind : 絹の暖簾
- p32、terrace : 軒先、歩廊
- p33、bed : 寝台、寝床、布団
- p34、bracelet : 腕輪
- p34、handkerchief : 袱紗
- p37、turnsole : 向日葵
- p40、wine : 美酒、酒杯
- p41、veiled curtains : 簾

- p44、andante : アンダンテ
p44、allegro : アレグロ
p47、hemp trousers : 麻の裾着
p60、cedrella : セドリラ
p66、sounds of violin : 管弦の音
p67、nife : 懐刀
p67、scarf : 袱紗
p73、veil : 面紗・覆い幕
p73、coat : 外套
p74、skirt and chemise : 衣服
p75、divan : 長椅子
p83、rhyme : 韻
p92、chess : 象棋指し
p95、card : 名刺
p95、plum : 李
p96、balcony : 出窓
p109、poplar : ポプラ
p109、brassiere : 肌着
p110、dress : 衣装
p112、cup : 器
p113、hint : 疑惑
p114、bream : 淡水魚 ブリーム
p114、plane-leaves : 篠懸の木
p115、junk : 帆掛け船
p119、trick : ごまかし
p125、towel : 浴布
p133、kingfisher : 翡翠^{かわせみ}
p159、catalpae : 木ささげ
p161、rhythmic : 軽快な
p171、tile : 瓦
p199、lute palace : 琴堂
p214、guitar and lute : 胡琴と古箏 (琴瑟相和)